

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「間違いい」「間に合う」「間抜け」「間が悪い」「間が良い」……。

日本語には間の大切さを教える言葉がたくさんある。

私は演出をするとき、役者に「①間置いてください」あるいは「②半間置いてください」と言うことがある。

次の台詞を観客にきちんと伝えたい場合は、その直前に「間置いてもらう。一間というのは、ゆっくり息をする時間である。役者がゆっくり息をすれば、その時間が間になり、観客は、次にどういう台詞が出てくるのだろうと、気持ちを乗り出して聞きに来る。次を想像すると言いかえてもよい。

「半間置いて」というときは、一間置くと、くどすぎると思うときである。客にきちんと聞き取ってほしい台詞は、重要な台詞である。だから、あまり間を置き過ぎると、芝居がくどくなりすぎる。大切なものが多すぎると、受け手はうんざりするのである。

大切な台詞だけをきちんと立てて他はすつと流す、その勘所が台詞術のツボである。
もちろん、そのツボは役者によって勘所が異なり、他の役者に教えられるようなものではない。

故・古今亭志ん朝さんが父親の志ん生さんの芸について、こう語っていたことがある。志ん朝さんも名人だが、志ん生さんは昭和の大名人といわれた落語家。

「おやじが小声でボソボソとしゃべるんです。客は、何を言っているんだらうと身を乗り出す。そのタイミングで、くすぐりをパツと入れる。すると客はどうと受けるんです」

つまるところ、間のよさで客の笑いをとるのである。しゃべりの上手さは、間の上手さと言いかえてもよい。

私の実感でいえば、舞台上で役者がしゃべっている間は、観客の意識は舞台から押されていく感じになる。逆に、役者が間をとっている時間は、観客は舞台の上を引き寄せられる感じになる。つまり、役者と観客は舞台と客席の間で、押し引きのつな引きをくり返すことになる。

②これが、舞台と客席の間の「交流」である。心地よい交流を観客にさせてくれる役者が、名優ということになる。名優と一言でいっても、自在に心地よい台詞を発することができる役者など何万人に一人もいない。

台詞術のキホンでもあるにはあるが、やはりプロの場合は、持って生まれた才能の世界というほかない。

話芸の名人として有名な徳川夢声は、そのキャリアを無声映画の弁士からスタートしている。彼は他の弁士がいかにかしゃべろうかと努力しているときに、いかにだまるかを工夫したらしい。

弁士がだまるということは、間を置くということである。間が長すぎると客はじれる。「タルい」というジョウウタイになる。逆に間が短すぎると、話が「あ」なってしまう。「バタバタした感じ」に聞こえてしまうのである。

言いかえれば、間は、観客が話に積極的に参加する時間である。

話し手が触媒となつて、自分の想像力をふくらます時間でもある。間のないしゃべりと間のあるおしゃべり、散文と韻文のちがいである。散文は小説のように、読めば内容をすべて受け取ることができる。自分で想像力をふくらませなくても、内容がわかるように書くのが散文である。

ところが韻文は、受け手の想像力によつては、その内容さえ変わることもある。

③「古池や 蛙飛びこむ 水の音」
有名な芭蕉の俳句である。この俳句に接したとき、受け手は自分の想像力を働かさなければ、鑑賞することができない。古池の後に続く「や」は切れ字である。強意の助詞ということもできるが、われわれ演劇人の視点から見ると、「間を空ける場所」でもある。

「古池や」といった後に、一間空ける。受け手は、古い静かな池を句に積極的に「う」することになる。そして芭蕉は、池の中に飛びこむ蛙を見せてくれる。蛙が飛びこんだ後の池には、ただ静かにはもなが広がっている。

「古池や」と切れ字がある場所で、芭蕉と受け手は交流する。そして句を読み終わったときに、芭蕉が提示した世界の広がり共感し、感動を共有するのである。

④話芸で言うところの間は、俳句の切れ字のようなものである。そのしゅん間を受け手に想像させ、そして次の台詞を言い終わったときに、感動を共有する。

間があることで、話し手と観客は一体になれるのである。

俳句の切れ字の場合は、受け手は自分の間で続きを読む。間の長さは、受け手の読解力や、その作品をどの程度深く味わいたいか、によつて変わってくる。

切れ字と同じように、話芸の間は長すぎても短すぎてもいけない。また、その日その日の客席のふんいきによつても、テキ正な間の長さに変化する。お年寄りが多ければ、必然的に間はたつぷりとなるようになる。若者が多い場合は短くなる傾向がある。若者は、反応時間が早いからである。

(竹内一郎「人は見た目が9割」より)

- ※1 くすぐり…演目の本筋とは直接関係のないしゃべりやうちわネタで観客の笑いをとること。
- ※2 無声映画…音声の入っていない映像だけの映画。弁士がその内容を解説した。
- ※3 触媒…化学で、他の物質の反応をうながす物質。
- ※4 散文…韻文に対して通常の文章。
- ※5 韻文…リズムや決められた音節数のある文章。詩歌など。
- ※6 芭蕉…江戸時代の俳人。松尾芭蕉。
- ※7 切れ字…俳句をそこでいったん切り、よいんを持たせる語。

ら一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 共メイ

【ア メイ声 イ メイ白 ウ 悲メイ エ メイ信】

B テキ正

【ア 快テキ イ 強テキ ウ テキ確 エ 汽テキ】

問三 部①「一間置いてください」とあるが、役者は何のために「一間」を置くのですか。部①の次の段落中のことばを使って二十字以内で説明しなさい。

問四 部1〜5の「間」の中で、「ま」と読むものを全て選び、番号で答えなさい。

問五 部②「これ」の内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 役者がしゃべっている間は観客はだまって聞いているが、役者がだまると観客がそのすきにおしゃべりを始めるというくり返し。

イ 役者が台詞を言っている間は観客は受け身になり、役者がだまっている間は観客の気持ちは舞台の上に乗りに出すということのやりとり。

ウ 舞台の上の役者と客席の人たちが、舞台と客席の間のかべをこえてやりとりをすることで一体となったときに生み出される笑い。

エ 役者が台詞を言うのをやめて間をとるときに起こる、舞台上の役者をあつとうするほどの観客の熱気。

問六 空らん あ に入る語として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア つまらなく イ わからなく
ウ おもしろく エ あわただしく

問七 部③「古池や 蛙飛びこむ 水の音」で中心的にうたわれていることは何か。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一人でいるさびしさ イ 古池の静けさ
ウ 水の音の心地よさ エ 蛙のユーモラスな動き

問八 空らん い う に入ることばを、本文中からそれぞれ漢字二字でぬき出して答えなさい。

問九 部④「話芸で言うところの間は、俳句の切れ字のようなものである」とあるが、後のア、エを、

(1)「話芸で言うところの間」と「俳句の切れ字」に共通して言えること

(2)「話芸で言うところの間」だけに言えること

(3)「俳句の切れ字」だけに言えること

のどれにあてはまるか分類し、記号で答えなさい。

ア 長さは受け手によって決まる
イ 長すぎても短すぎてもいけない
ウ 受け手はその間に想像力を働かせる
エ 受け手に合わせて長さを変えなければならない

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

次郎は生まれて間もないときから六歳になるまで「乳母や」(お浜)の家で育てられていた。実家に帰っても母(お民)や兄弟にはなまず、母親の目をぬすんでは小学校のそばに住んでいるお浜と会っていたが、五年生のとき、小学校が取りこわされると同時に、お浜はゆくえ知れずになっていた。その後、母方の祖父母(正木)の家で生活していた次郎は、肺をわずらい正木家でりよう養っている母のかん病をしながら学校に通っている。

お民はいよいよいけなくなる四、五日前、枕もとにすわっていた次郎の顔をまじまじと見ていたが、その目を正木のお祖母さんのほうに向けて言った。

「お浜のいどころはわかりましたかしら。」

次郎は、このごろ、お浜のことはほとんど忘れていた。彼には「お浜」という言葉が、まったく耳新しくさえ響いた。それに、彼の記憶に残っているかぎりでは、母とお浜とは、決して仲のいい間柄ではなかった。だから、母のその言葉を聞いた時には、彼は喜ぶというよりもむしろ不思議に思っただけであった。お祖母さんは答えた。

「ああ、そうそう、まだお前には言わなかったのかね。何でも駐在所のかたに頼んで調べてもらったので、よくわかったんだそうだよ。やっぱり今でも炭坑で働いているんだとさ。」

「では、呼んでもらいますしょうかしら。」

「そうかい、ぜひ会いたけりや、すぐにでも呼べるんだがね。でも、お前だいじょうぶかい。ひさびさで会って、気が立ったりしては、病気に悪いんだがね。」

じつは、お浜には二、三日前に、すでに正木の老人から手紙が出てあり、まさかの時には電報を打つから、すぐ来るようにと、必要な旅費まで送つてあるのだった。お祖母さんはそれをお民にかくしていたのである。

「だいじょうぶですわ。」

お民はにっこり笑って、また次郎を見た。

電報がすぐ打たれた。次郎はそれからみょうにうきうきしだした。しかし、それはうれしくてたまらないからではなかった。うれしいにはうれしいが、その奥に不安とも、好奇心ともつかぬ、えたいの知れないものが働いていた。彼は自分のおちつかない気持ちを自覚して、それを母に見せまいとつとめたが、彼の動作はいつもそれをうらぎった。彼は用もないのに、部屋を出たりはいったりした。薬の時間でもないのに、ひよいと薬壘をとり上げ、その目盛りをすかして見たり、栓をぬいてみたりした。また、ぼかんとして庭を見つめていて、急に気がついたように母の顔をのぞいたりした。お民は彼のそんなようすを見ながら、いつも微笑していたが、彼はその微笑にでつくわすと、よけいにそわそわした。

お浜は電報を受け取つてすぐたちさえすれば、翌日の夕方までにはつくはずであった。次郎はお祖母さんの言葉でそれを知っていた。しかし彼は、その時刻になっても病室におちついていて、お浜のつ

く時間なんか忘れていたのかのように見えた。そのくせ、彼の言った
り、したりすることは、とんちんかんなことが多かった。彼の頭の
中は、もうお浜でいっぱいであった。目の前にお浜の顔が始終現れ
たり消えたりした。それは、さほど鮮明ではなかったが、かえって
そのために、彼はまぼろしの中にすいこまれるような気持ちだった。

「次郎ちゃんの乳母やが来たよう。」

誠吉がはだして庭をまわって来て、そう言う、またすぐ走って
行った。

次郎は思わず立ち上がりそうにしたが、しいて自分をおちつけた。
「早く迎えておいでよ。」

祖母と母がほとんど同時に言った。次郎はそれですぐ立ち上がっ
たが、さほどせきこんでいるふうには見えなかった。それでも、母屋
に行くまでの彼の足が宙にういていたことは、彼自身が一番よく
知っていた。

お浜はもう茶の間にすわって、正木の老人とお延を相手に話して
いた。誠吉やそのほかの従兄弟たちは、土間に立って、珍しそうに
そのようすを眺めていた。次郎がはいつて行くと、お浜は持ってい
たうちわを畳に置いて、中腰になりながら、

「まあ。」と叫んだ。その叫び声には、ほとんど喜びの調子はこもつ
ていなかった。それは異様なものを見た驚きの叫びだった。次郎の
火傷のあとのまばらなひふの色が、彼女をびっくりさせたのである。
お延がそれに気がついてすぐ説明し出した。説明を聞きながらも、
お浜はなんども次郎の顔に目を見はった。次郎はお祖父さんのそば

にすわって、まぶしそうにその視線をよけていた。
説明を聞き終わると、お浜はまゆ根をよせて次郎のほうにひざを
のり出しながら、

「以前からおいたでしたが、今でもあい変わらずですね。でも、た
いしたことにならないで、ようございましてわ。」

彼女は、次郎と自分との間に二、三尺の距離があるのがもどかし
そうであった。次郎は、しかし、お客にでも行ったように行儀よく
すわって、固くなっていた。彼のこの時の気持ちはじつにへんてこ
だった。彼の前にすわってものを言っているのは、なるほど三年前
に別れた乳母やにちがいない。しかし、同時にまったく別人のよう
な気もする。それはちようど、着なれた着物をいちどしまいこんで
ひさかたぶりにまた取り出して着る時のような感じである。

お浜は、たて続けに、いろんなことを彼にたずねた。彼は、しか
し、ただ「うん」とか「ううん」とかいう、簡単な返事をするだけ
であった。その簡単な返事ですら、いつものように自然には出な
かった。時とすると、初めての人に対するような、ていねいな返事
をしそうになることさえあった。

(下村湖人『次郎物語』より)

※1 炭坑……石炭を掘るところ。

※2 誠吉……次郎のいとこ。正木家に住んでいる。

※3 お延……誠吉の母。お民の姉。

※4 火傷……この少し前、次郎は火薬で遊んでいて顔を大やけどしていた。

※5 おいた……いたずら。

※6 尺……長さの単位。一尺は約三十cm。

問一 ——部A「せきこんでいる」、B「まゆ根をよせて」の意味とし
て最も適切なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

A 「せきこんでいる」

ア いらだっている

イ 続けてせきが出る

ウ ひどく急いでいる

エ 具合が悪い

B 「まゆ根をよせて」

ア 心配そうに

イ おこったように

ウ 気の毒そうに

エ おどろいたように

問二 ——部①「母のその言葉を聞いた時には、彼は喜ぶというよ
りもむしろ不思議に思った」とあるが、その理由を二点に分け
て、本文中のこばを使って答えなさい。

問三 ——部②「まさかの時」とは、だれのどういう時か、答えな
さい。

問四 ——部③「それ」の内容として最も適切なものを次から選び、
記号で答えなさい。

ア お浜に電報を打ったこと

イ お浜が炭坑で働いていること

ウ 次郎がお浜のいどころを知らないこと

エ お民の病氣をお浜に知らせていること

問五 ——部④「彼は自分のおちつかない気持ちを自覚して、それ
を母に見せまいとつとめた」とあるが、そんな「彼」の様子が
よく表れているところを、文の形で二カ所ぬき出し、それぞれ
初めの五字を答えなさい。

問六 ——部⑤「彼のこの時の気持ち」をたとえを用いて表してい
る部分を解答らんに合うように、本文から四十五字以内でぬき
出して、初めと終わりの五字ずつで答えなさい。

問七 ——部⑥「その簡単な返事ですら、いつものように自然には
出なかった」とあるが、その時の次郎の心情として最も適切な
ものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 初めて会うお浜に気おくれがして、どのように接してよい
のか分からずとまどっている。

イ すっかり変わってしまったお浜に、以前のおもかげが見い
だせず、がっかりしている。

ウ 久しぶりに会えてうれしくはあるが、照れくさくてむじや
きにふるまえないでいる。

エ 火傷のことではかられるのではないかと、びくびくしてか
しこまっている。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 の中の漢字を使って、Aの「**団結**」から始めて、Bの

前提 までの間の五つの熟語じゆくごを考えて「熟語しりとり」をして
いった時、 の中で使わなかった漢字二字をふくむ四字熟
語を答えなさい。

「熟語しりとり」とは、例えば「根本↓本気↓気分↓分数↓数
字……」のように、前の熟語の下の子から始まる熟語を続けて
いくものです。

A **団結** ↓ ① **結** ↓ ② ↓ ③ ↓ ④ ↓ ⑤ **前** ↓ B **前提**

面・同・体・合・小・目

問二 次の〃部を適切な表現に改めて、正しい言い方に直しなさい。

- ① 今月からおこづかいを少しずつ貯めようと思います。なぜなら自転車を買いたいと思います。
- ② 「外は暑かったですでしょう。何をお飲みになりますか。」
- ③ もし明日雨が降っても、遠足は中止します。

問三 次の() に入ることわざ・慣用句を後の から選び、

完成させて答えなさい。ただし、 には漢字かひらがなが一文
字ずつ入ります。

- ① 算数の得意な君が、あんな簡単な計算をまちがえるなんて、
() だね。
- ② どうしたんだい。そんなにしょんぼりして。まるで()
じゃないか。
- ③ おさそいありがとうございます。() (だと思って、やっ
て参りました。

・ も山のにぎわい

・ 弘法も の誤り

・ に塩

問四 漢字の中には、「行」(コウ・ギョウ)のように、複数の音読

みを持つものがあります。「実行」と「行列」のように、同じ漢
字が違う音読みで使われている二字の熟語を二組考えて答えな
さい。ただし、「行」は使ってはいけません。

解答

一

- 問一 ア じざい イ 基本 ウ 状態 エ ていじ
問二 A ウ B ア
問三 (例) 次の台詞を観客にきちんと伝えるため。
問四 1、2、4 (組んで不順可)
問五 イ
問六 エ
問七 イ
問八 イ 想像 う 参加
問九 (1) ウ (2) イ、エ (組んで不順可) (3) ア

二

- 問一 A ウ B ア
問二 (例) ・お浜のことはほとんど忘れていたところへ、突然お浜という言葉が出たから。
・母とお浜とは決して仲のいい間柄ではなかったはずなのに、母がお浜の話をしたから。
問三 (例) お民が死にそうになった時
問四 エ
問五 ・しかし彼は / ・次郎は思わ
問六 着なれた着 / 時のような(感じ)
問七 ウ

三

- 問一 大同小異
問二 ① 買いたいと思うからです ② お飲みになりますか ③ 降ったら
問三 ① 弘法も筆の誤り ② 青菜に塩 ③ 枯れ木も山のにぎわい
問四 (例) ・左右 / 右折 ・四月 / 満月